

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第一章「3・11」

5

「これはもうだめか」

号機の制御室からはホットライン（専用電話）で外部電源の代わりにDGが起動しているとの連絡が入っていた。異変は突然やってきた。1、2号機の制御室からだった。

「DGトリップ（落ちた）！」

「何？」

なぜDGが止まるのか。制御室で電話を代わったD班当直長伊沢郁夫52が驚くべきことを告げた。

「SBO事象です。原災法10条に該当すると思います」

「えっ？」

「एस、ビー、オー。何が使えて何が使えないのか確認中！」

ステーションブラックアウト（SBO）。制御室が真っ暗で何も見えないという意味だ。1999年9月のJCO臨界事故（茨城県東海村）を機に制定された原子力災害対策特

別措置法10条では、緊急事態に発展する可能性がある場合は国に通報しなければならぬ。

「10条、宣言します」

3月11日午後3時42分、テレビ会議に緊急した吉田の声が響いた。

さらに伊沢はわずか10分後、こう告げる。

「15条に該当します」

原子炉圧力と水位が読み取れなくなり、燃料冷却ができていくか分からなくなった。状況が原災法15条の「緊急事態」に移行したというのだ。

「飛行機のエンジンが全部止まって、計器も見えない状態で操縦しろと言われているようなものです。これはもうだめかなと、最悪のことを考えましたね」。吉田はそう振り返った。（敬称略。年齢、肩書は当時共同通信 高橋秀樹）

「おっ、どうなってる」。福島第一原発の免震重要棟2階にある緊急時対策本部に、所長の吉田昌郎（56）が入ってきた。吉田は1、3号機が地震で緊急停止したことを確認すると満足そうにうなずき、壁のテレビモニターに目をやった。NHKが大津波警報を出していた。福島は3階。

「これなら大丈夫」

吉田はそう思った。各号機の海側には熱交換器や非常用ディーゼル発電機（DG）を冷却するための非常用海水ポンプが設置されている。このポンプが津波をかぶらない限り大丈夫と考えたのだ。テレビ画面では

緊迫の免震重要棟



福島第一原発の免震重要棟2階にある緊急時対策本部＝2011年4月（東京電力提供）

日本地図の太平洋側が真っ赤な線で縁取られていた。対策本部の大きな円卓には本部長の吉田以下、各号機の中央制御室をサポートする発電班、計器や電源復旧を担う復旧班など12班の班長が座る。

免震棟は2007年の中越沖地震で柏崎刈羽原発（新潟県）の事務棟が壊滅的被害を受けたのを教訓に建設された。完成したのは10年7月だ。独立した非常用電源を備え、テレビ会議システムのある対策本部室は6

51平方メートルの広さがあった。

地震後、最も早く駆けつけたのは発電班副班長の野口秀一（54）だ。各